

②昭和20年代まで本町は、台地上の平地林と畑、低地及び台地に刻まれた侵食谷の水田という風に極めて単調な土地利用がなされていた。山林に関しては大地主は存在せず、耕地と共に細切れた土地所有であった。それが30年代から工場、ゴルフ場等の都市的施設が建設され出し、40年以降は台地の過半がニュータウン地域に指定され、正にベットタウン化しつつある。

③木下河岸は17世紀後半の治水工事により、利根川舟運の一部がここで一旦途切れ、陸路に変換する接点として、繁栄し出した。更にこの地が、利根川沿岸の河岸の中で陸路江戸への最短距離を保っていたこと、三社詣客対象の木下茶船を設け物資のみならず旅客をも扱ったことが、河岸機能を高めた。こうして、本来は台地末端の竹袋村の切添新田とし開発された木下は、農業よりもむしろ交通商業機能に特化してゆき、やがて親村を凌いで発展する。明治末、成田線の開通や利根川堤防の構築による移転で、河岸機能を喪失するが、木下駅前に移転した家は商業機能を継承し、現在、印西町及び近接2村の地方中心商店街を形成しており人口も多い。

④江戸幕布の野馬立場用地であった台地の中央、侵食谷沿いに17世紀後半、百姓寄合新田である惣深新田が成立した。しかし干害、洪水、風害等の自然災害に悩まされ、150年間に戸数が半減する。明治以降も荒地、林地に囲まれた僅かな耕地で零細農業を営み、他から隔絶した後進地域であり続けた。昭和初期に東部の山林が開かれ飛行場が出現し、戦後その跡地に開拓農業部落(原)が誕生した。原は当初旱魃に苦しむが、多種類の作物や家畜の導入、機械使用、畑灌施設の設置等を経て印西町の先進農業地域へ発展していった。近年、この地がニュータウン用地に指定され耕地が半減すると、商品価値の高い施設野菜栽培や大規模専業養鶏等の集約的農業に重点が置かれている。

中野区の地理学的考察

— 商業を中心として —

平 田 文 子

(1)研究の目的

本論文では、商業を第1の柱に、また人口を第2の柱として、中野区の地理学的考察を行なった。その目的は、23区における中野区の地理学的地位及び、中野区内の地域的特色を明らかにすることの2点である。

(2)研究の枠組

第I章では中野区を概観し、第II章では、本論文の第2の柱となる「中野区の人口と居住環境」について述べた。そして第III章では、今回の中心テーマである「中野区の商業」を扱い、第IV章に総括として、全体の要約を載せた。この中で、第II章は人口問題及び都市問題関係の文献を講読の後、国勢調査報告、住宅統計などの統計分析を中心に、研究を進めた。また、第III章では、商業地理学の文献を参考にし、且つ商業統計表と区役所資料の分析結果を元に、中野区の商業について考察した。そしてここでは、今回の研究目的のひとつである中野区内の地域的特色を調べるため、第2節卸売業、第3節小売業、第4節飲食業の箇所に、それぞれ「町丁別の特色」の項を設けた。なお、ここには現

地フィールド調査の結果を適宜盛り込み、特に商店密度の高い地区と低い地区に着目した。

また、第5節の消費者調査分析では、中野区が行なったアンケート調査の資料を元に、その中から地域商店街の利用状況と、買い物環境に対する消費者の要望事項を取り上げ、これにフィールド調査の結果をからませた。

(3)研究の結果

中野区は、23区の中で都心への交通至便な住宅地区にある。このため、都心へ勤めに出る若年層の単身世帯が大変多く、区民の定住性は、他区と比較してやや低目の結果が出ている。こうしたことは、中野区の持ち家率の低さ、つまり、アパート数の多さ、及び、人口移動の激しさの面にも如実に現われている。

また、中野区の人口密度は23区中、豊島区に次いで第2位であるが、これは、区内に大規模なオープンスペースが無いことが原因である。なお、中野区内を地域的に見ると、区の北部は南部と違って人口密度が低く、新青梅街道以北の練馬区寄りの地区では、人口増加が続き、それ以南では人口減少状態が続いている。つまり、区の南部と北部では、かなり様相を異にしていると言える。

次に、商業については、中野区が住宅地であり、しかも隣接して新宿副都心が存在するため、その規模は大変小さい。したがって、中野区の商業全体には際立った特色はないが、区内の個々の地域を見れば、それぞれ独特の商店街が形成されている。区の北部には最寄り品中心の駅前型商店街が多いのに対し、区南部には、歴史の古い街道沿いの商店街や、安価性が売り物である住宅近隣型商店街などである。また、中野駅北口には買い回り品中心のショッピングセンターが形成されている。しかし、中野区全体を見れば、最寄りの品中心の、住宅生活に密着した商店街が圧倒的多数を占め、ここにも「住宅地中野」の姿が現われている。

岐阜市の衣服産業について

—国鉄岐阜駅前の繊維問屋街を中心として—

深尾博子

岐阜市は県庁所在地として岐阜県全体の中核機能をもった都市ではあるのだが、衣服製造卸売業の特化が見立ち、他の日本の都市と異なり製造業部門の発展が著しい。政治都市は大抵の場合工業の発展が見られないのだが、この意味では岐阜市は異例だと言えよう。また、岐阜市の既製服産業は製造面においても卸売面においても、全国でも有数の産地にまで進展しているのだが、単なる一地方都市にすぎない岐阜市がいつ頃から、どうしてここまで成長させることができたのかを究明したく思いフィールドを決定した。

調査方法としては、フィールドでの実際的な調査は夏休みなどの長期休暇に行ない、現地へ赴けない間は統計や論文調査に当てることにした。

フィールドワークでは業者の生の声を聞くことに主体を置く積りであったのだが、問屋街の中はい